

部会・委員会報告

〈医用画像システム部会〉

DICOM Standards Committee (京都) 参加報告



DICOM 委員会 委員長 鈴木 真人 (東芝メディカルシステムズ (株))

1. はじめに

DICOM 規格を管理保守している DICOM Standards Committee (DSC) が2009年4月21日に京都市にて開催され、JIRA 代表としてこれに参加したので報告する。

今回は日本で開催ということで会場の選定や参加者への情報提供などで JIRA 事務局の全面的サポートを受けた。

2. DSCの位置づけ

DSC は DICOM 規格の制定・保守、および個別の Working Group (WG) の活動に関して全体的な監督と方向付けを行う最高議決機関である。すでに広範な範囲をカバーしている DICOM 規格であるが、医用機器と医療技術の進歩に合わせた新たな手技や情報の追加定義、そして膨大なページ数になった本文のスペルミスの修正やよりの確な言い回しへの変更などの修正が随時行われている。

比較的大きな変更や追加は補遺 (Supplement) として、またスペルミスや文面の追加・変更は修正 (Correction) としてそれぞれ WG から提案される。大掛かりな補遺を発行する際には、担当する WG から新規作業申請 (New Work Item Proposal (NWIP)) が DSC に出され、審議の上実務に着手して良いかが決められる。補遺はそれなりに分量のある変更なので、担当する WG は何回も電話会議 (T-con) やメーリングリスト (ML) を利用した検討を行い、DSC に提出する最終案を作り上げる。修正は最近非常に数が多くなっており、単純な語句の修正レベルはまとめて処理されることも多い。

補遺も修正も DSC で投票にかけられる前に WG の中でも一段上に位置する WG-06 が内容を確認する。補遺も修正も WG-06 が承認したものは DSC 開催に先立って DSC メンバにメール投票の依頼が来る。DSC の席上では投票の結果が報告され、否認や棄権 (理由を明記することになっている) の理由を検討するのが DSC の役割である。修正に関しては、一件毎に投票するのは大変なほどの件数があるので、最近は修正パッケージ (CPPack) としてまとめて投票できるように配慮されている。(もちろん個別に否認や棄権もできるフォーマットになっている。) ちなみに現時点で補遺は144件、修正は980件 発番されている。

3. 2009年第1回DSC@京都

2009年第1回目の DSC が2009年4月21日に京都で開催された。DSC は1年ほど前に日程と開催地が決定されるのが常で、今回の京都開催も2008年4月に中国で開かれた DSC にて決定されていた。ちなみに最近および今後の DSC の開催実績・予定は

2008年 4月 中国、 6月 ドイツ、 12月 米国

2009年 4月 日本、 6月 ギリシャ、 12月 米国

となっておりアジア・欧州・アメリカを巡るように設定されている。

今回の京都会議は JRC2009・ITEM2009に引き続いて開催されるように設定されたので、DSC だけでなく WG-10 (DICOM Strategic Advisory WG: 4月20日) と WG-13 (Visible Light WG: 4月22日) が併せて開催された。WG-10,13の報告は別途あるものとし、本報告では21日の DSC のみに触れさせていただく。

DSC に先立って20日の夜に DSC 及び WG の参加者が集まりウェルカムパーティが JIRA 主催で催された。昨年末以来の世界的な経済事情も影響して海外からの参加者が予想を下回り総勢30名弱となったが、JIRA から桂田副会長と吉添事務局長が参加し、和気藹々とした雰囲気出席者の評判も上々であった。(最終日の挨拶でメンバが一番褒めていたのが、このウェルカムパーティであったのは、気のせいだけではないと思う。)



写真1 桂田副会長挨拶



写真2 ウェルカムパーティ

さて DSC であるが、いつものように MITA (Medical Imaging and Technology Alliance) の Howard さんが事前に配布されたアジェンダに沿って資料を提示し、議長の Emmanuel さんが議事を進めていく。今回の最初の議題は、Emmanuel さんの任期が終了するに伴う後任の選出であったが、自薦・他薦とも出ず、後日各自が議長にコンタクトすることになった。

続いて DSC に参加したい企業 2 社 (New Members) の審議が可決された後、WG に参加するメンバについて個人の申請をどう扱うかが議論となった。事務局の見解は、団体・企業でも個人でも必要な書類が提出されれば承認するのが基本であるとコメントがあった。この場合 特に特許に関する宣言書の適用範囲が申請者本人に限定されることになり、本人が所属する団体や企業への縛りが発生しない点について問題ありという意見もあったが、現状ではその点は問題としないとなった。純粹に個人で DICOM 規格の制定に関与したい人は限られていると思うが、個人としての活動を阻害しないポリシーは見習う点がある。

事務局から補遺の進捗状況が報告された。JIRA が主体となって進めていた Supp.124 (Parameters for Display Systems) は、日本側の担当者の事情で止めていたが、状況が好転したので、パブリックコメント募集のフェーズに進めるべく、手続きをする予定である。

DICOM 規格自体の XML 化は、規格の検索・参照が飛躍的に便利になるので、関係者の期待も大きい。前述のようにあれだけの量の規格を変換し、図や表を新しいフォーマ

ットに置き換えるのは膨大な作業量である。今回もこの進捗報告があったが、完了までにはまだ時間がかかりそうである。また2つのWGからNWIPが出され承認された。これは近い将来に補遺として投票にかけられる予定である。

1年ほど前から話題になっているDICOM規格の翻訳や参照に関する制約事項はMITA事務局から検討すべき点のまとめが報告された。JIRAは規格全体を和訳する方向で翻訳とチェックを毎年進めているが、DICOM規格が常に変化していることを考慮し、和訳版はあくまで参考資料と位置づけて公開する限り、本文全文の翻訳公開に問題はないとのコメントをもらった。

引き続き各国のDICOM関連団体からの活動報告があった。先述したように、今回の会議は出席者が限られてしまい、報告があったのは欧州(COCIR)・台湾(MISAT)・日本(JIRA)の各規格推進団体および米国のSCO・HITSP/B・ACR・IHE-NAで、カナダ・中国・インド・韓国およびHL7とISO/TC215からは報告がなかった。

各WGの報告では、昨年RSNAでのDSC以降の進捗が各々報告された。最後に今後のDSC開催日程を確認して閉会となった。

JIRAからの報告は当日資料がJIRAホームページに公開されているが、

1) IHE-Jが主体となって国内で開催しているIHE WorkShopの紹介

これはIHE-NAがDICOMとIHE TF (Technical Framework)の普及を進める際の活動の見本としたいとの事で、若干詳しく説明した。

2) JJ1017で放射線治療分野の拡張を行い、V3.1としてパブリックコメントを募集していること

JJ1017はV3.0が既にDICOM規格の参照規格として登録されており、V3.1が確定したらDICOM規格の修正を提案する必要がある。

3) DICOM規格の翻訳状況紹介

16のセクションは全て和訳が公開されているが、9つが2001年版、7つが2008年版であること、今後も和訳をすすめることを紹介した。

などを中心に報告した。



写真3 DSC 京都会議全景



写真4 JIRAからの報告

以上の内容で無事DSCを終了できたことは、主催国として大変喜ばしいことであった。